

## IV 3.11 以後，いま総合人間学を問う

### Just Now Questioning the Synthetic Anthropology since 3.11

#### 学問としての「総合人間学」の課題

##### —その切り札について—

#### The Problem of Synthetic Anthropology as an Academic Discipline: Concerning the most Important Point

上柿 崇英

UEGAKI, Takahide

#### はじめに

総合人間学会が発足してから七年目を迎えた。多くの知識が細分化され、また人間社会がさまざまな行き詰まりを見せる中、「総合人間学」という言葉には、今でも多くの人を惹きつけるだけの響きがあるだろう。特に3.11は、われわれにとってあらゆる既存の枠組みの再検討を促すだけの力があり、今日この言葉が期待される意味合いはさらに大きくなったと言えるだろう。しかし他方でこの十数年、「総合」、*「学際」*、*「文理融合」*といった文言が流行した結果、乱立した新語はまさに玉石混淆の様態を呈している。このような中で「総合人間学」は果たしてひとつの学問として、存在感を持って生き残っていけるだろうか。小論では、同じように新領域を開拓した他の試みを引き合いに出しながら、この「総合人間学」という貴重な学問的試みの可能性を、一会員が目線から考察してみたい。

#### 1 総合人間学のあゆみ

まず「総合人間学」がどこから出発し、何を目指していたのかということは、『シリーズ総合人間学』（全3巻、小林直樹・小原秀雄・柴田義松編、学文社、2006）や『人間はどこに行くのか』（学会誌第一号、総合人間学会編、学文社、2007）から十分に読み取ることができる。中でも目を惹くのは、この学会を構成する研究者がいかに多様かという点であろう。専門分野の幅は物理学から医学、文学から教育学までに至り、しかも多くの研究者は各々の分野で皆著名な方々である。それはまさに第一線で積み重ねられたあらゆる*「知」*を「人間学」へと結集させるべく揚げられた狼煙であったとも言える。

これほど背景が多様なため、「総合人間学」に寄せられた期待は、確かに人それぞれ違っていたかもしれない。とはいえ漠然とした形で多くの方が共有していた問題意識がなかったわけではあるまい。そしてその問題意識は、おそらく初代会長小林直樹氏が指摘した三つの論点で十分フォローできるように

思える。つまり第一に、伝統的な人間学や人類学的知見だけでは今日われわれが直面する人間の問題にアプローチしきれないこと、第二に細分化された専門知が深まるほど総体としてのわれわれ人間自身を捉えられなくなっていること、第三に環境危機や破滅的戦争といった深刻な世界問題を受けてわれわれの文明自身が問われている、ということである（前掲 総合人間学会編、2007：1-4）。またこの六年間のシンポジウムや学会誌の特集を振り返ってみると、科学技術、自然と人間の破壊、戦争、都市と農村、進化論、平和といったように、学会ではこの問題意識を反映するように、今日人間を考えるにあたって非常に重要な個別テーマが取り上げられてきたということも理解できる。

とはいえ先の問題意識を「総合人間学」というひとつの学問として成長させるためには、次の一步が必要なのではないだろうか。例えば“総合”を目指した試みが陥りやすいのは、特定の対象を複数の観点から論じてみたものの、専門ごとに異なる見解があるという事実以上は何も議論が深まらない、という事態である。新領域がひとつの学問として自立できるかどうかは、おそらくこの必然的な通過点を克服できたかどうかにかかっているのである。

## 2 “総合”の方法をめぐって

ここで少し、いくつかの新領域の事例を見ながら、“総合”の方法について考えてみたい。まず一般的に総合的な新領域が現れる際、最も典型的なケースとなるのは、特定の新しい研究対象が現れ、その研究対象を扱うには学際的にならざるを得ないというものである。たとえば今日新領域として十分な市民権を得た「環境諸学」はこのケースであり、おそらく「総合人間学」の出発点も構造的には同じである

と考えてよい。しかし「環境諸学」と「総合人間学」には大きな違いがあり、それは前者が常に解決すべき具体的な問題を想定しているのに対して、後者の想定する問題は抽象的で曖昧であるということである。このことから十分に予想できるのは、新しい研究対象であっても対象となる問題が具体的に想定できない場合は、異なる専門知の結合がいつそう難しくなるということである。

別の視点から考えてみたい。同じように新しい研究対象から出発し、しかも問題が抽象的で曖昧であるにもかかわらず、新領域としての自立に成功した事例がある。それは「平和学」である。興味深いのは「平和学」の形成過程には繰り返し引用される

「平和」の定義——ヨハン・ガルトゥングの「構造的暴力」の不在としての「積極的平和」概念——が存在し、それが常に参照点として機能してきたという点である（岡本三夫・横山正樹『平和学の現在』、法律文化社、1999）。ここからはもうひとつの教訓が得られるだろう。つまり特定の明快な定義と理論的枠組みが共有されていることは、議論を深めるにあたって非常に重要であるということである。

実はこのこと自体は“総合”でなくとも、新領域が出現する際には広く一般的なプロセスである。例えば新領域の「エントロピー経済学」は——筆者の専門分野に身近な例ばかりで恐縮だが——近代経済学ともマルクス経済学とも異なる環境や生命の問題を扱えられる第三の経済学を目指して創始された。しかしそれを可能にしたのはやはり、熱力学的エントロピー概念から経済過程を分析するという、新しい理論的な枠組みが提示されたことであった（室田武・多辺田政弘・槌田敦『循環の経済学』学陽書房、1995）。つまり研究対象の新旧を問わず、新領域を支えるのはあくまで参照点となる新しい枠組みの提

示なのである。

もっともエントロピー経済学の事例からは別の教訓も得ることができる。それは創始直後の特定の枠組みに過度に依存しすぎると、議論が硬直し、結果的には新領域の活力を維持することが難しくなるということである。この点から参考になるのは、「環境社会学」である。「環境社会学」は一方で明確な問題を共有する「環境諸学」のひとつとして理解可能であるが、ここで注目したいのは、それが創始される契機となったのは、やはり独自の理論的枠組みの存在であったということである。さらにここでは「被害の構造分析」や「生活環境主義」といった当初の枠組みに固執することなく、後に「コモンズ論」、「正当性論」といった新しい理論的枠組みを次々に導入し、その都度議論が活性化されてきた（飯島伸子・鳥越皓之・長谷川公一・船橋晴敏編『講座環境社会学（全5巻）』有斐閣、2001）。ここからわれわれは最後の教訓を得ることができよう。つまり新領域の自立には、参照点となる何らかの理論的枠組みが重要な役割を果たすが、それはひとつである必要はなく、複数を使い分けながら常に更新されていくことが望ましいということである。

以上を踏まえて、「総合人間学」における“総合”をいくつかのステップで考えてみよう。まず「総合人間学」は新しい研究対象から出発しているが、扱う問題が抽象的・曖昧であるために、専門知の総合はそもそも容易ではない。ここでひとつの解決方法は、直接“人間”を問題にするのではなく、例えば“科学技術”や“戦争”といった、より具体的なテーマ／キーワードを絞り込み、それを徹底的に“総合”的に解明するというものである。しかしこの方法には限界がある。というのもそれらをいくら多角的に論じても、結局「総合人間学」から捉えるこ

とで現れる独自の観点が導出できなければ、その成果は既存の学問の成果と何ら変わらないからである。つまり具体的なテーマを論じるにしても、必要なのはやはり「総合人間学」としての独自の理論的枠組みなのである。そしてここからわれわれは、本学会ではこの理論的枠組みに相当するものがこれまでほとんど議論の中心になってこなかった、ということに気づかされるのである。

### 3 「総合人間学」の切り札になり得るもの—結びにかえて

新領域が新しい学問として成功するためには、“寄せ集め”を一步踏み出した、核となる概念・枠組みの存在が不可欠である。そして「総合人間学」の独自性を活かすためには、どのようなものが考えられるのだろうか。例えば筆者が思いつくのは「人間本性論」と「文明論」である。「人間本性論」とは、人間本性、換言すると人間の“自然さ”とは何かを理論的に説明することであり、そこには進化生物学的説明だけでなく、同時に社会的・歴史的・存在論的な説明も必要となろう。まさに“総合的”でなければ解くことができないはずである。そして「文明論」とは、そのような本性を持つ人間が作り出す社会システム・文化システムを理論的に説明することであり、それを解明するためにはやはり“総合的”でなければならないはずである。

ここには他の学問にはできない、「総合人間学」にしかできないオリジナリティが潜在していると筆者は思う。しかし実は、この「人間本性論」と「文明論」の両方が組み合わせり、しかも多くの会員が参照点として共有できそうな理論的枠組みが、すでに本学会には存在するのである。それは小原秀雄氏の「自己家畜化論」である（小原秀雄『ペット化する

る現代人』NHK ブックス，1995)。「自己家畜化論」は、人間と自然、そして人間が作り出す「モノ」の進化論的相互作用によって人間存在を理解する。そしてここから描き出される人間の「自然さ」は、生物学的な基礎とは必ずしも一致しない。同論は「人間本性論」と「文明論」を統一的に扱う理論的枠組みをもたらす可能性を秘めているのである。紙面の関係上筆者にこれ以上の考察は許されていない。しかし筆者は「総合人間学」に必要なのは最初の「参照点」であると確信している。そしてそこに思い切って「自己家畜化論」をすえ、それを「総合的に検討するところから出発してみることを提案したい。

上柿 崇英 (大阪府立大学／環境思想)